松塩地方における方言推量助動詞－ダラの分布

中村　純子

The Spread of the Inference of the Auxiliary Verb "Dara" in the Shoen District of Nagano Prefecture

NAKAMURA Junko

要　旨

本稿では松塩地方の方言推量助動詞、－ズラ、－ダラ、－ラの分布及び使用層を調査し、－ダラ北上の有無の要因を、承接を考慮し明らかにする。調査の結果、－ダラは松塩地方では、どの年齢層にもほとんど使用されておらず、その要因として－ズラと承接が重ならず、－ズラと交代がしにくいことが考えられる。また、用言に－ンを介して－ズラに繋がる用法がこの地方では見られず、このことも体言格に接続する－ダラの北上を許さなかった要因と考える。

キーワード

松塩地方　　方言推量助動詞－ダラ　　承接

目　次

1. はじめに

2. －ズラ、－ダラ、－ラの承接

3. 松塩地方の方言調査

3－1. 調査概要

3－2. 調査結果及び考察

3－2－1. －ズラの分布と使用層

3－2－2. －ダラの分布と使用層

3－2－3. －ラの分布と使用層

3－2－4. 松塩地方の－ズラ、－ダラ、－ラの承接及び－ダラの北上を妨げた要因

4. おわりに

1．はじめに

長野県で使用されている特徴ある方言として－ズラ、－ラがある。－ズラ、－ラは共通語の－ダローに相当し、推量の助動詞と考えられている。しかし、近年－ズラの使用は減少してきている。その要因として新しい方言形－ダラが愛知県、静岡県から北上してきていることがあげられる。今村（1990）は1985年の調査の結果、下伊那全域で、若年層により－ダラが使用されていることを報告している。馬瀬（1980、1992）は、1971年から1973年にかけて上伊那の4地点（中川村片桐、伊那市富県、旧・長谷村非持山｜現・伊那市長谷[1]｝、辰野町小野）で調査を行い、新しい方言形－ダラの使用について以下のように報告している。

－ダラは南信地方では南部から北上を続け、若年層では重点調査地点をとれば、上伊那地方中川村片桐、伊那市富県、長谷村非持山でも用いるに至る（1992：p.548）。

この時点で－ダラは旧・長谷村非持山｜現・伊那市長谷｜までの北上が認められたことになる[2]。

さらに中村（1999）は、上伊那の4地点（中川村片桐、伊那市富県、旧・長谷村非持山｜現・伊那市長谷｝、辰野町小野）において1998年、調査を行った結果、－ダラがさらに北上し、辰野町小野まで分布していること、壮年層、若年層によって、－ズラに代わり使用されていることを報告している。さらに中村（1999）は、辰野町小野においては、－ダラと－ズラの交代が上伊那の他の3つの調査地点と比べ、活発ではなかったことも報告している。その要因として、－ズラの承接が－ダラの承接を含まないことをあげている（詳細は次節参照）。

そこで、本論の目的は辰野町小野と隣接する松塩地方（松本市・塩尻市）の方言推量助動詞、・ズラ、－ダラ、－ラの分布と使用層を調査し、－ダラ分布の有無の要因を、承接を考慮し明らかにすることである。（地図1.【方言調査関係地域地図】、地図2.【－ダラの分布】参照）

2．－ズラ、－ダラ、－ラの承接

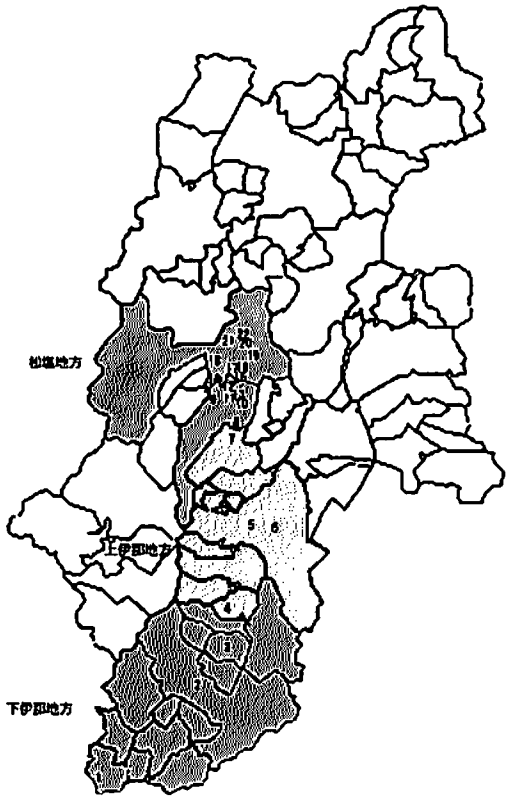
－ズラと－ダラの交代は江端（1977）が指摘している通り、承接法が似ていることが要因としてあげられる。馬瀬（1980）によると、－ラは動詞、形容詞（同型の活用語も含む）の終止・連体形に接続する。一方、－ダラは動詞、形容詞、形容動詞（同型の活用語も含む）、体言及びある種の副詞に接続する。ただし、活用語のうち、動詞、形容詞には形式名詞－ンを介してその終止・連体形に、形容動詞は語幹に接続する。つまり－ダラは体言格の語句に接続する。－ズラは－ダラと同様、体言格の語句に接続するが、用言の終止・連体形に直接接続する用法もある。ただし、この点は地域・年代によって異同がある。馬瀬（1980）によれば、－ンを介して－ズラにつながる用法は新しいものであるという。

今村（1990）は、下伊那郡豊丘村で若年層男女、高年層男女を対象に推量方言の調査を行い、その結果、用言接続では、高年層は「用言＋ラ」と「用言＋ンズラ」を、若年層では「用言＋ラ」を主に使用するが、「用言＋ンダラ」も使用していることを報告している。また体言接続については、高年層は「体言＋ズラ」を、若年層は「体言＋ダラ」を主として用いていることを確かめている。

中村（1999）においても、上伊那の３地点、中川村片桐、伊那市富県、旧・長谷村非持山｜現・伊那市長谷｜で、今村（1990）と同様の傾向を示したことを確認している。高年層では体言接続は、「体言＋ズラ」を、壮年層は「体言＋ダラ」と「体言＋ズラ」を併用しつつも、「体言＋ダラ」の使用が多い傾向にあること、若年層は「体言＋ダラ」を主として用いていること、用言接続は、高年層では「用言＋ラ」、「用言＋ンズラ」、壮年層では「用言＋ラ」、「用言＋ンズラ」、「用言＋ンダラ」を併用していること、若年層では「用言＋ラ」、「用言＋ンダラ」を主として用いていることを報告している。辰野町小野でもこの傾向は変わらないが、この地点においては、用言に－ズラが直接承接する形が、どの年齢層でも用いられていた。「用言＋ズラ」は中川村片桐、伊那市富県、旧・長谷村非持山｜現・伊那市長谷｜の３地点では主として高年層に、それもわずかに認められたのみである。さらに、辰野町小野は－ズラの使用が壮年層・若年層において、他の３地点と比し、活発であった。この結果からこの地域の壮年層・若年層において、－ズラから－ダラへの交代が遅れている要因として、－ズラの承接法が「体言＋ズラ」、「用言＋ズラ」、「用言＋ンズラ」の３つあるのに対し、－ダラは「体言＋ダラ」、「用言＋ンダラ」の２つの承接法しかなく、－ズラと－ダラの承接が重ならないことが考えられた。

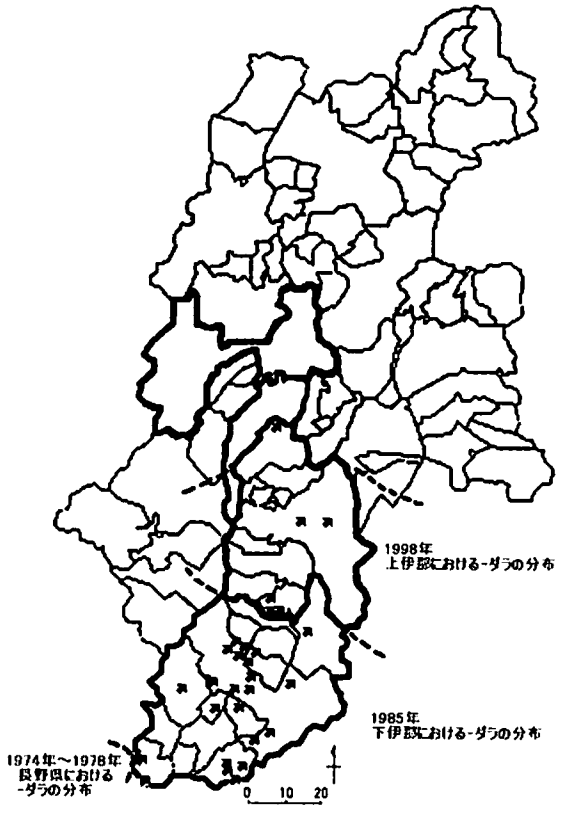
このようなことから、辰野町小野と隣接する松塩地方でも－ダラの分布を調査するにあたり、－ズラ、－ダラ、－ラの承接を考慮に入れて、調査する必要があると考える。

地図１　【方言調査関係地域地図】



1．下伊那郡根羽村
2．下伊那全域
3．下伊那郡豊丘村
4．中川村片桐
5．伊那市富県
6．旧・長谷村非持
7．辰野町小野
8．塩尻市北小野
9．塩尻市洗馬
10．塩尻市塩尻東
11．塩尻市大門
12．塩尻市広丘
13．塩尻市片丘
14．松本市今井
15．松本市内田
16．松本市中山
17．松本市平田
18．松本市新村
19．松本市入山辺
20．松本市里山辺
21．松本市島内
22．松本市浅間

地図２ 【－ダラの分布】



①馬瀬（1992）図G15「そうだろう」より引用（ただし、馬瀬（1980、1992）は記述研究においては、1971年から1973年の時点で上伊那において、－ダラが分布していることを報告している）
②今村（1990）長野県下伊那方言地図、地図「アメダロー」より作成
③中村（1999）の1998年の調査による－ダラの分布

３．松塩地方の方言調査

３－１．調査概要

以上の先行研究を踏まえ、まず、上伊那地方辰野町小野と隣接する松塩地方において、－ズラ、－ダラ、－ラの分布の有無を、地域別、年代別に調査した。なお、馬瀬（1980、1992）の調査と比較できるように、なるべく調査地を同じに選定した。以下、調査の概要について記す。

調査日時：2008年10月～2009年1月
調査場所：塩尻市（北小野、洗馬、塩尻東、大門、広丘、片丘）6地点
　　松本市（今井、内田、中山、平田、新村、入山辺、里山辺、島内、浅間）9地点
被験者　：高年層（70歳前後）31名、壮年層（40歳前後）31名
　　若年層（15歳前後）30名　計92名

各地域、各年代、男性1名、女性1名を被験者としたが、男性のみ、女性のみとなった地域も数箇所ある。

調査方法：調査票を基にしたインタビュー調査

調査者　：中村純子・福島達也

調査項目：「そりゃそうずら」、「そりゃそうだら」、「そりゃいーら」を「言う」、「聞いたことがあるが、言わない」、「言わないし、聞いたこともない」から選択

3－2．調査結果及び考察

3－2－1．－ズラの分布と使用層

「そりゃそうずら」を言うかどうか尋ねた結果を地域別・年代別に記す。（表1・地図3参照。ただし、地図は壮年層男性のみ）

まず、塩尻市の結果について記述する。「そうずら」は高年層では12名中8名が「言う」と答えており、多く使用されている。「聞いたことがあるが、言わない」と答えた被験者は12名中、北小野男女、洗馬女性、大門男性の4名であった。壮年層でも「言う」と答えた被験者は12名中10名、「聞いたことがあるが、言わない」と答えた被験者は2名、大門女性、広丘女性である。それに対して若年層は12名中9名が「聞いたことがあるが、言わない」と答えており、「言う」と答えた被験者は塩尻東女性2名のみであった。「言わないし、聞いたこともない」と答えているのは、広丘の男性1名のみであった。

松本市でも塩尻市とほぼ同様の結果である。高年層では19名中、島内女性2名を除き、17名が「言う」と答えている。壮年層では、19名中、内田男性、里山辺女性の2名が「聞いたことがあるが、言わない」と答えている。浅間女性は「聞いたことがあるが、言わない」としながら、自分の答えに自信がないようだった。他16名は「言う」と答えている。それに対して若年層は18名中、明確に「言う」のは5名、今井男性、内田女性、中山男性、新村男女である。島内女性1名は「言うかもしれない」と答えた。12名は「聞いたことがあるが、言わない」と答えている。

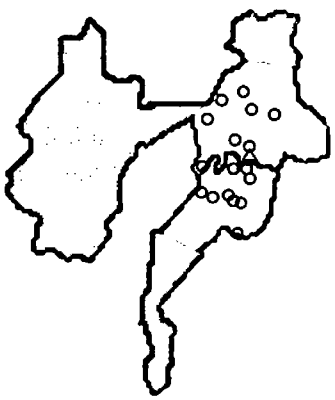
この結果から、松塩地方では－ズラは高年層、壮年層では使用されているが、若年層では使用が激減していることが分かる。しかし、「聞いたことがあるが、言わない」被験者は、塩尻市では36名中15名（内若年層9名）、松本市では56名中17名（内若年層12名）で、「言わないし、聞いたこともない」と答えた被験者は全92名中、若年層の1名のみであった。－ズラを使用しない若年層を含め、－ズラの認知度は極めて高いことが分かる。

表1.【そうずらの分布及び使用層】

地区名	若年層		壮年層		高年層	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
塩尻市　北小野	—	△　△	○	○	△	△
塩尻市　洗馬	—	△　△	○　○	—	—	△　○
塩尻市　塩尻東	—	○　○	○　○	—	○	○
塩尻市　大門	△　△	—	○	△	△	○
塩尻市　広丘	△　×	—	○	△	○	○
塩尻市　片丘	△	△	○　○	—	○	○
松本市　今井	○	△	○	○	○	○
松本市　内田	△	○	△	○	○	○
松本市　中山	○	△	○	○	○	○
松本市　平田	△	△	○	○	○	○
松本市　新村	○	○	○	○	○	○
松本市　入山辺	△	△	○	○	○	○
松本市　里山辺	△	△	○	△　○	○	○
松本市　島内	△	○?	○	○	○	△　△
松本市　浅間	△	△	○	△?	○	○

○言う　△聞いたことがあるが、言わない　×言わないし、聞いたこともない　?不確定
—被験者不在　以下、表2、表3、同じ

地図3.【松塩地方ーズラの分布・壮年層男性】



網掛けした地域は、2005年4月1日松本市と合併した旧四賀村・旧奈川村・旧安曇村・旧梓川村、同じく2005年4月1日に塩尻市と合併した旧楢川村を表す。今回の調査地は旧松本市・旧塩尻市に限定してある。以下地図4、地図5同じ

3－2－2．－ダラの分布と使用層

次に「そりゃそうだら」を言うかどうか尋ねた結果を地域別・年代別に記す。（表2・地図4参照。ただし、地図は壮年層男性のみ）

塩尻市では高年層では12名中、大門男性1名のみ「言う」と答えた。11名は「言わないし、聞いたこともない」と答えている。壮年層では12名中「言う」のは北小野の男性と女性、洗馬の男性の3名で、「聞いたことがあるが、言わない」被験者は5名、「言わないし、聞いたこともない」被験者は4名だった。若年層では北小野女性2名、塩尻東女性2名の4名が「言う」と答えていた。「聞いたことがあるが、言わない」のは大門の男性2名、6名は「言わないし、聞いたこともない」と答えている。「言う」と答えたのは、そのほとんどが、辰野町に近い地区の被験者である。

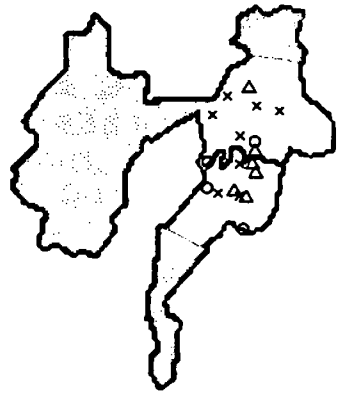
松本市でも「そうだら」を使用する被験者はほとんどいず、聞いたこともない被験者も多い。高年層では－ダラを使用している被験者はおらず、19名中、浅間男性1名が「聞いたことがあるが、言わない」で、18名が「言わないし、聞いたこともない」と答えている。壮年層では19名中、今井男性、中山男性、中山女性、入山辺女性、島内女性の5名のみ「言う」、ただし、そのうち中山男性、入山辺女性は「言うかもしれない」と－ダラの使用について確信は持てないようだった。内田男性、平田女性、浅間男性の3名が「聞いたことがあるが、言わない」、11名が「言わないし、聞いたこともない」と答えていた。若年層の被験者では「言う」と答えた被験者は18名中、島内女性1名のみだった。内田男女、中山女性、入山辺女性、浅間女性5名が「聞いたことがあるが、言わない」、12名が「言わないし、聞いたこともない」と答えている。

以上の結果から、－ダラについては「言わないし、聞いたこともない」という被験者が塩尻市では36名中21名、松本市では56名中41名と多く、この地域では－ダラは認知されているとは言いがたい。「聞いたことがあるが、言わない」と答えた被験者は、塩尻市では36名中14名、松本市では56名中9名で、壮年層と若年層がほとんどであり、高年層では、聞いたこともない被験者がほとんどであることが分かった。一方、「言う」と答えた被験者は塩尻市では36名中8名、松本市では56名中6名のみで、塩尻市の高年層1名を除き他は壮年層、若年層の被験者であった。地域的には辰野町に近い被験者が多く、地理的な影響も認められる。

表2.【そうだらの分布及び使用層】

地区名	若年層 男性	若年層 女性	壮年層 男性	壮年層 女性	高年層 男性	高年層 女性
塩尻市　北小野	—	○ ○	○	○	×	×
塩尻市　洗馬	—	× ×	○ ×	—	—	× ×
塩尻市　塩尻東	—	○ ○	△ ×	—	×	×
塩尻市　大門	△ △	—	△	×	○	×
塩尻市　広丘	× ×	—	×	△	×	×
塩尻市　片丘	×	×	△ △	—	×	×
松本市　今井	×	×	○	×	×	×
松本市　内田	△	△	△	×	×	×
松本市　中山	×	△	○?	○	×	×
松本市　平田	×	×	×	△	×	×
松本市　新村	×	×	×	×	×	×
松本市　入山辺	×	△	×	○?	×	×
松本市　里山辺	×	×	×	× ×	×	×
松本市　島内	×	○	×	○	×	× ×
松本市　浅間	×	△	△	×	△	×

地図4.【松塩地方ーダラの分布・壮年層男性】



3－2－3. ーラの分布と使用層

「そりゃいーら」という方言形を言うかどうか尋ねた結果を地域別・年代別に記す。(表参3、地図5参照。ただし、地図は壮年層男性のみ)

塩尻市の高年層のーラの使用については、12名中、北小野男性、北小野女性、2名が「聞いたことがあるが、言わない」と答えており、塩尻東男性は「言わないし、聞いたこともない」と答えているが、他9名は「言う」と答えている。壮年層は12名中、北小野男性、大門女性、広丘女性、3名が「聞いたことがあるが、言わない」と答えているが、他9名は「言う」と答えている。ただし、大門男性はその答えに確信が持てないようだった。それに対して、若年層は北小野女性2名、塩尻東女性2名、計4名のみ「言う」と答えてい

る。「言わないし、聞いたこともない」と答えていたのは大門男性、広丘男性である。他6名は「聞いたことがあるが、言わない」としていた。

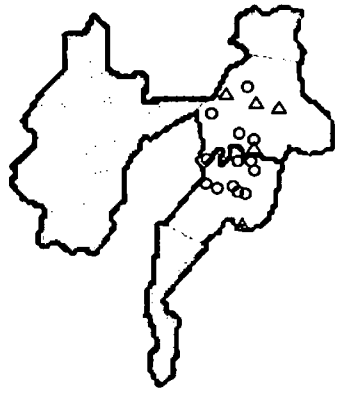
松本市では、高年層は19名中、「言う」と答えた被験者は8名、7名が「聞いたことがあるが、言わない」と答えており、そのうち島内男性は自分の答えに確信が持てないようだった。新村女性、入山辺男性、島内女性2名、計4名が「言わないし、聞いたこともない」と答え、そのうち島内の女性2名は自分の答えに自信を持っていない。壮年層では19名中11名が「言う」、そのうち1名入山辺の女性は「言うかもしれない」と答えた。6名が「聞いたことがあるが、言わない」と答えた。そのうち1名、里山辺男性は、答えに確信がない。今井女性、平田女性、2名が「言わないし、聞いたこともない」としていた。若年層では7名が「言う」、9名が「聞いたことがあるが、言わない」、中山女性、平田男性の2名が「言わないし、聞いたこともない」と答えている。

以上の結果から、－ラは、塩尻市では壮年層、高年層に比較的使用されているが、松本市ではどの年代においても、塩尻市ほど使用されていないことが分かる。塩尻市は36名中22名、松本市は56名中26名が、「言う」としていた。また「言わないし、聞いたこともない」被験者は、塩尻市に36名中3名、松本市に56名中8名いた。－ラは－ダラよりはるかに認知されているが、－ズラよりも使用度も認知度も低いことが分かる。

表3.【い－らの分使及び使用層】

地区名	若年層		壮年層		高年層	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
塩尻市　北小野	—	○ ¦ ○	△	○	△	△
塩尻市　洗馬	—	△ ¦ △	○ ¦ ○	—	—	○ ¦ ○
塩尻市　塩尻東	—	○ ¦ ○	○ ¦ ○	—	×	○
塩尻市　大門	△ ¦ ×	—	○?	△	○	○
塩尻市　広丘	△ ¦ ×	—	○	△	○	○
塩尻市　片丘	△	△	○ ¦ ○	—	○	○
松本市　今井	○	△	○	×	○	△
松本市　内田	△	○	△	○	○	△
松本市　中山	△	×	○	○	○	○
松本市　平田	×	△	○	×	△	○
松本市　新村	○	○	○	○	△	×
松本市　入山辺	△	○	△	○?	×	△
松本市　里山辺	○	△	△?	○ ¦ △	○	△
松本市　島内	△	○	△	○	△?	×? ¦ ×?
松本市　浅間	△	△	○	△	○	○

地図 5.【松塩地方－ラの分布・壮年層男性】



これらの結果から松塩地方では、－ズラは壮年層、高年層に使用されていることが分かった。また。－ラも同じく壮年層、高年層に使用されているが、松本市より塩尻市で使用されている。しかし、松塩地方では辰野町に近い地域を除き、どの年齢層でも－ダラの使用はほとんど見られず、聞いたこともない被験者も多い。－ダラの北上は止まったと考える。さらに若年層においては－ズラ、－ラの使用もほとんど見られなかったことから、この地方の方言推量助動詞は衰退していくと予測される。

3－2－4．松塩地方の－ズラ、－ダラ、－ラの承接及び－ダラの北上を妨げた要因

本節では、－ズラ、－ダラ、－ラの承接を考慮に入れて調査を行った結果を記し、－ダラの北上が止まった要因を探る。被験者には以下の言い方を「言う」、「聞いたことがあるが、言わない」、「言わないし、聞いたこともない」の中から選択してもらった[3]。

「体言＋ズラ」	そりゃそうずら	「体言＋ダラ」	そりゃそうだら
「用言＋ラ」	暑いら	「用言＋ズラ」	暑いずら
「用言＋ンズラ」	暑いんずら	「用言＋ンダラ」	暑いんだら

若年層は方言形の使用がほとんどなかったので、本節では壮年層の結果のみを記す（表4参照）。

まず、塩尻市の結果を記す。体言接続では、－ズラは4－2大門女性、5－2広丘女性を除き、10名が使用している。－ダラを使用する被験者は12名中2名、1－1北小野男性、2－1洗馬男性のみであった。この2名の男性は「体言＋ズラ」と「体言＋ダラ」を併用している。「体言＋ダラ」のみ使用している被験者はいなかった。

用言接続では「用言＋ラ」を使用しているのは6名（内1名は不確定）、「用言＋ズラ」を使用しているのは6名だが、「用言＋ラ」と「用言＋ズラ」を併用しているのは、1－1北小野男性、2－1洗馬男性、5－1広丘男性、6－1片丘男性の4名であった。「用言＋ラ」のみ使用している被験者は、3－2塩尻東男性、4－1大門男性（答えは不確定）、「用言＋ズラ」のみ使用するのは3－1塩尻東男性、6－2片丘男性だった。そ

のうち、体言に－ズラを使い、用言には－ラを使い、しかも「用言＋ズラ」を用いていない、つまり－ズラの承接法が－ダラの承接法と重なる被験者は、3－2塩尻東男性、4－1大門男性のみである。しかし、その2名は「体言＋ダラ」は用いていなかった。

用言に－ンを介してズラの使い方をする被験者は3－1塩尻東男性、6－1片丘男性（答えは不確定）のみで、他の被験者にはこの用法はない。また、「用言＋ンダラ」を用いる被験者は全くいなかった。塩尻市では用言に－ンを介して－ズラ、－ダラに繋がる用法は分布していないと考える。既述の被験者の3－2塩尻東男性、4－1大門男性も「用言＋ンズラ」は用いていなかった。

次に、松本地区の結果を記す。被験者19名のうち、8－1内田男性、13－2里山辺女性、15－2浅間女性（答えは不確定）の3名を除き、16名が体言接続では－ズラを使用している。－ダラを使用する被験者は7－1今井男性、8－2内田女性、9－1中山男性、12－2入山辺女性、14－2島内女性5名のみであった（内8－2、9－1、12－2の3名の答えは不確定）。そしてその5名は－ズラも併用していた。－ダラのみ使用している被験者はいない。

用言接続では、「用言＋ラ」を用いるのが、11名（内1名不確定）、「用言＋ズラ」を用いるのが10名（内2名不確定）、そのうち「用言＋ラ」と「用言＋ズラ」を併用しているものが5名、8－2内田女性、9－1中山男性、9－2中山女性、11－1新村男性、15－1浅間男性だった。体言には－ズラを使い、用言には－ラを使い、しかも「用言＋ズラ」を用いていない、つまり－ズラの承接法が－ダラの承接法と重なる被験者は4名で、7－1今井男性、10－1平田男性、11－2新村女性（答えは不確定）、14－2島内女性であった。そのうち2名は7－1今井男性、14－2島内女性は「体言＋ダラ」も用いていた。

用言に－ンを介して－ズラを使用する被験者は4名、7－1今井男性、9－1中山男性、13－1里山辺男性、14－2島内女性しか認められなかった。この内2名7－1今井男性、14－2島内女性は－ズラの承接法が－ダラの承接法と重なっていた被験者と同じであった。つまり、この2名のみは既述の上伊那の3地点（中川村片桐、伊那市富県、旧・長谷村非持山｜現・伊那市長谷｜）の被験者と方言推量助動詞の用法が近いと言える。しかも、7－1今井男性、14－2島内女性は「体言＋ダラ」も用いていた。しかしその2名を含め、用言に－ンを介して－ダラを使用する被験者は1名もいなかった。

この結果から松塩地方は、ゆれをみとめつつも、－ズラは「体言＋ズラ」、「用言＋ズラ」の2つの承接法があることが分かった。一方－ダラの承接は「体言格＋ダラ」のみである。－ダラと－ズラの交代の要因として、承接が同じであることがあげられたが、このように松塩地方では、辰野町小野と同様、－ダラが－ズラの承接を包摂しない。それが、－ダラの北上を許さなかった要因の1つと考えられる。さらに松塩地方が辰野町小野とも異なる点は、この地方には－ンを介して－ズラに繋がる用法はどの年齢層でもほとんどなく、そのことがより体言格に承接する－ダラの北上を許さなかった要因だと考えられる。この地方の－ズラが、形式名詞、－ンの意味を含んでいるかについては稿を改めて考察したい。また、松塩地方では「用言＋ラ」の用法が上伊那地方に比べ少なく、それが用言接続には－ラ、体言接続には－ズラという相補分布的な使い方をしていた上伊那の3地点（中川村片桐、伊那市富県、旧・長谷村非持山｜現・伊那市長谷｜）と異なっており、それも－ダラが－ズラと交代することを妨げた要因と考えられる。しかし、－ラの使用に関して

は、同じ被験者のなかでもゆれがあり[4]、さらに精査を要する点である。

表4.【壮年層方言推量助動詞の承接】

		体言＋ズラ	体言＋ダラ	用言＋ラ	用言＋ズラ	用言＋ンズラ	用言＋ンダラ
1－1	塩尻市　北小野男性	○	○	○	○	△	×
1－2	塩尻市　北小野女性	○	×	△	△	△	×
2－1	塩尻市　洗馬男性	○	○	○	○	△	×
2－2	塩尻市　洗馬男性	○	×	△	△	△	×
3－1	塩尻市　塩尻東男性	○	△	△	○	○	△
3－2	塩尻市　塩尻東男性	○	×	○	△	△	×
4－1	塩尻市　大門男性	○	△	○？	△	△	×
4－2	塩尻市　大門女性	△	×	△	△	×	×
5－1	塩尻市　広丘男性	○	×	○	○	×	×
5－2	塩尻市　広丘女性	△	△	△	×	×	×
6－1	塩尻市　片丘男性	○	△	○	○	○？	△
6－2	塩尻市　片丘男性	○	△	△	○	×	×
7－1	松本市　今井男性	○	○	○	△	○	△
7－2	松本市　今井女性	○	—	△	×	×	×
8－1	松本市　内田男性	△	△	○	△	△	△
8－2	松本市　内田女性	○	○？	○	○	△	×
9－1	松本市　中山男性	○	○？	○	○	○	△
9－2	松本市　中山女性	○	×	○	○	△	△
10－1	松本市　平田男性	○	×	○	△	△	×
10－2	松本市　平田女性	○	△	×	○	×	△
11－1	松本市　新村男性	○	×	○	○	×	×
11－2	松本市　新村女性	○	×	○？	△	△	×
12－1	松本市　入山辺男性	○	—	△	○	△	×
12－2	松本市　入山辺女性	○	○？	△	○？	×	△
13－1	松本市　里山辺男性	○	×	△？	○	○	×
13－2	松本市　里山辺女性	△	×	○	△	×	×
13－3	松本市　里山辺女性	○	×	△	△	△	×
14－1	松本市　島内男性	○	×	×	○？	△	△
14－2	松本市　島内女性	○	○	○	△	○	×
15－1	松本市　浅間男性	○	△	○	○	×	×
15－2	松本市　浅間女性	△？	×	×	△？	×	×

○言う　△聞いたことがあるが、言わない　×言わないし、聞いたこともない　？不確定
—聞きもれ

4．おわりに

辰野町に隣接する松塩地方では、方言推量助動詞－ダラは壮年層にわずかに使用者はいたものの、若年層に使用者はほとんどなく、北上は止まっていた。また、－ズラ、－ラの使用も若年層ではほとんどなく、方言推量助動詞そのものがこの地方では衰退していくことが予測される。若年層に－ズラを使用しない理由を聞くと、特に理由はなく、「周りで使わないから使わない」という答えが多い。いわゆる「田舎くさい」イメージから使用を

避けている様子ではなかった。「方言にコンプレックスを持っているから、方言を使用しない」という従来の意識は薄れつつあり、方言形を日常聞く環境が少なくなっていることが、方言の衰退に拍車をかけているといえる。また、－ダラの使用について聞いたとき、「自分は使用しないが、南信の友人が使用していた」、「配偶者が南信出身であるから聞いたことがある」と答えた被験者も多く、人々の移動、交流が活発である今日、地域別調査の意義はどこまであるのか改めて考えさせられた。今後方言調査の新しい枠組みを作っていくことが課題となる。

【注】

[1] 上伊那郡長谷村は伊那市と2006年3月31日合併。

[2] －ダラが一概に愛知県、静岡県から入ってきた新しい語といえないことは今村（1990：p.80）に指摘されている。下伊那地方南部で関係のありそうな－ダラズの分布があるからである。また馬瀬(1980: p.80）は－ダラズの中心は長野県の北信であるが、その勢力が東信、中信に向かっていることを報告している。中信地方である松塩地方の－ダラの分布を調査するにあたり、この点も考慮に入れる必要があった。しかし、今回の調査で－ダラズという語形の使用の有無を被験者全員に聞いたところ、全員が「言わないし、聞いたこともない」と答えていることから、北信の－ダラスの分布の影響は松塩地方にはないと考えられる。

[3] 今村（1990）は長野県下伊那郡においては「用言＋ラ」は共通語のダローに相当し、「用言＋ズラ」はノダローに相当することを報告している。それゆえ今回の調査では、共通語では形式名詞－ノ（－ン）を介した表現のほうが自然だと思われる以下のような場面を想定して、インタビュー調査を行った。

「自分の家を訪ねてきた友人が汗を拭いています。それを見て友人に話しかけて」

1）暑いら。冷房入れるか　2）暑いずら。冷房入れるか　3）暑いんずら。冷房入れるか

4）暑いんだら。冷房入れるか　5）暑いんだろ。冷房入れるか。

以上を「言う」、「聞いたことがあるが、言わない」、「言わないし、聞いたこともない」から選択してもらった。

また、－ダラが用言に直接接続する用法があるかどうかもみるために「あそこに大きな建物が見えるだら」という表現を使用するかも尋ねたが、この表現を使用するものはほとんどいなかった。

[4]「そりゃいーら」と「暑いら」の使用の有無が一致しない被験者は壮年層では塩尻市で12名中5名、松本市で19名中5名いた。

【参考文献】

今村かほる（1990）「推量形の表現価値に関する試論—長野県下伊那郡方言「ラ」「ズラ」と「ダロー」「ノダロー」との比較をめぐって」『昭和女子大学大学院日本文学紀要』1
江端義夫（1977）「中部地方の推量表現の分布について」『国語学』110
中村純子（1999）「上伊那における推量方言－ダラの分布」『ことばの研究』第10号 長野県ことばの会会誌
馬瀬良雄（1980）『長野県上伊那誌民俗篇下』上伊那誌刊行会
馬瀬良雄（1992）『長野県史方言編』社団法人長野県史刊行会

【謝辞】

本調査に際し、多くの方々にご協力頂きました。松本市の調査にあたっては、新村公民館館長浅川安治氏をはじめとした松本各地域の公民館長、松本地区中学校校長・教頭先生、ならびに担当の先生方には各地域の被験者、学生の方々を紹介して頂きました。また、塩尻市の調査に際しては塩尻市役所清水進氏、塩尻市社会福祉協議会百瀬努氏にご協力頂き、地域の方々を紹介して頂きました。92名にのぼる被験者の皆様には貴重なお時間をさいて調査にご協力頂き、この調査を実施することができました。また、松本大学福島明美氏、伊那西高等学校福島達也氏にも、調査にご協力頂きました。方言地図の作成には信州大学平澤真由美氏のご助力を得ました。心より感謝申し上げます。最後にこの研究は松本大学より地域共同研究として研究費の助成を頂きましたことを記し、感謝の意を表したいと存じます。